

令和7年度(2025年度)調査研究事業報告書

生涯学習事業に係る県内の現状 及び県外の先進事例



【R7くまもと県民カレッジ
主催講座(後期)リーフレット
表紙】



【R7地域の人づくり講座
(上天草教室)】



【R8くまもと県民カレッジ
認定講師一覧表紙】

令和8年(2026年)3月
熊本県教育委員会

目次

はじめに	1
第1章 調査研究の概要	2～3
【調査結果】社会教育基礎調査結果	
第2章 県と市町村の連携事業	
1節「地域の人づくり講座」3年次経過報告	4～10
【事例1】山村留学を核とした、地域人材の発掘、育成を目的とした講座（産山村）	
【事例2】地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目的とした講座（和水町）	
2節「地域の人づくり講座」2年次経過報告	11～13
【事例3】地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目的とした講座（上天草市）	
3節「地域の人づくり講座」1年次経過報告	14～15
【事例4】地域人材による主体的な公民館講座の開発・実施を目的とした講座（あさぎり町）	
第3章 学習機会提供事業	
【県民カレッジ主催講座】	16～19
① 「熊本学（西南戦争）」コース	
② 「生き方」コース	
③ 「未来の食卓」コース	
④ 「共生社会の実現」コース	
第4章 他県の先進事例	20～22
【事例】生涯学習の推進「鳥取県立生涯学習センター」	

はじめに

日頃より、本県の社会教育・生涯学習の推進に多大なる御理解と御協力を賜り、地域の学びを支えていただいている市町村教育委員会をはじめ、関係機関・団体の皆様に深く感謝申し上げます。

さて、県では「くまもと新時代教育大綱」及び「第4期熊本県教育振興基本計画」に基づき、家庭・地域・学校が連携し、県民一人ひとりが学びを通じて成長し、地域社会に参画できる環境づくりを進めてまいりました。特に、「家庭・地域の教育力向上」や「文化・スポーツの振興と生涯学習の推進」は、地域の持続的な発展に向けた重要な柱として位置づけられています。

今年度は、従来取組に加え、高校魅力化コンソーシアムとの連携が徐々に進展したことが大きな特徴となりました。地域と高校が協働し、学びの場を共有することで、若者が地域の魅力を再発見し、地域課題の解決に主体的に関わる機会が広がりつつあります。社会教育と学校教育が相互に補完し合う新たな連携の形が生まれ始めており、今後の展開が期待されるところです。

また、県と市町村が協働して実施する「地域の人づくり講座」、生涯学習を支える人材育成を目的とした「生涯学習コーディネーター養成講座」、県民の多様な学習ニーズに応える「くまもと県民カレッジ」など、県民の学びを支えるための各種事業を継続して実施してまいりました。これらの取組は、地域コミュニティの活性化や、学習成果を生かした地域づくりの推進に寄与するものです。

本報告書では、令和7年度に実施した各事業の内容と成果を整理し、今後の生涯学習・社会教育の充実に向けた基礎資料として取りまとめています。本書が、市町村における施策の検討や地域の学びの場づくりに活用されることを願っております。

最後に、本年度の事業推進にあたり御尽力いただきました多くの皆様に、改めて心より感謝申し上げます。

令和8年（2026年）3月

熊本県教育庁市町村教育局社会教育課長

福永 公彦

第1章 調査研究の概要

1 調査の目的

(1) 市町村支援

市町村における学習機会提供事業の充実等、生涯学習振興の支援のため、地域課題解決に向けた学習プログラムの開発及び先進事例の情報収集を行い、市町村教育委員会をはじめとする関係機関に提供するとともに、次年度の事業に活用する。

(2) 市町村基礎情報収集

生涯学習推進及び社会教育行政に必要な基本的情報を収集し、社会教育課事業の基礎資料とする。

2 調査の対象

県内全市町村教育委員会（社会教育・生涯学習担当課：45市町村）、熊本市公立公民館（19館）、及び県外生涯学習センター

3 調査の実施期日

令和8年（2026年）1月7日（水）～令和8年（2026年）2月2日（月）

4 調査内容及び方法

(1) 県内市町村教育委員会、熊本市公立公民館に、基礎調査アンケートを依頼

(2) 人材養成・研修について先進的な取組を行っている生涯学習センターを視察

【鳥取県】鳥取県生涯学習センター 「とっとり県民カレッジ講座」等

5 県内市町村・熊本市公立公民館調査回収率

対 象	依頼市町村数	回収市町村数	回収率 (%)
市（教育委員会）	14	14	100
町（教育委員会）	23	23	100
村（教育委員会）	8	8	100
熊本市公立公民館	19	19	100
全 体	64	64	100

令和7年度（2025年度）社会教育基礎調査

1 教育委員会の社会教育関係職員数（R7.10.1現在）

（本庁主管課）

区分	課長	その他の職員 事務職員 技術職員 労務職員 社会教育指導員等	職員のうち以下の者（内数）		
			社会教育主事	社会教育主事の発令がないが、社会教育主事講習を修了している者	社会教育指導員
専任	20	184	6	10	26
兼任	26	60	3	6	0
会任	0	125	3	3	0
非常勤	0	13	0	2	0
計	46	382	12	21	26
職員数計	428				

（出先機関）※図書館、博物館、青少年教育施設、女性教育施設

区分	課長	事務職員 技術職員 労務職員等	職員のうち以下の者（内数）		
			社会教育主事	社会教育主事の発令がないが、社会教育主事講習を修了している者	社会教育指導員
専任	5	83	0	0	0
兼任	8	0	0	0	0
会任	0	225	0	0	0
非常勤	0	2	0	1	0
計	13	310	0	1	0

2 社会教育委員数（R7.10.1現在）

学校教育関係者	社会教育関係者	家庭教育関係者	学識経験者	その他	合計
73	160	47	65	45	390

「社会教育委員の会議」の設置の有無		研究調査の実施の有無	
○	45	×	0
○	3	×	42

3 社会教育施設数（R7.10.1現在）

区分	公民館			図書館	博物館	青少年教育施設	女性教育施設
	中央館	地区館	分館				
市町村立	34	99	214	50	10	6	4
うち指定管理 導入施設数	2	1	7	11	1	2	2
指定管理団体 名							
法人等立	0	0	0	0	0	0	0

自治公民館数（公民館類似施設数）	4199
行政区数	3836

市町村立公民館の運営体制見直しや施設の統廃合等に関する検討の有無	有	5
	無	40

4 公民館職員数（R7.10.1現在）

区分	館長	教委職員（内数）	公民館主事	教委職員（内数）	その他の職員	教委職員（内数）
専任	14	13	16	16	83	15
兼任	55	44	66	38	61	61
会任	34	18	38	26	189	35
非常勤	36	0	2	0	34	0

第2章

1節「地域の人づくり講座」3年次経過報告

【事例1】山村留学を核とした、地域人材の発掘、育成を目的とした講座（産山村）

1 1年次の計画

地 域 課 題
<p>○地域には様々な知識や技術を持つ人材はいるが、まだまだ多くの方が埋もれている状況 である。</p> <p>○地域の人材に講師として活躍してもらいたい。</p>



事 業 目 標
<p>山村留学を核として、自然活動や農業体験等について子どもたちに指導等ができる人材 の発掘、育成を通して、産山の自然や産業等の魅力を伝え、産山村が一体となって移住定住 の促進につなげる。</p>



講 座 企 画		
テーマ	地域の魅力 再発見！産山プロジェクト ～人・もの・地域のコミュニティづくり～	
講座目標	山村留学を核とし、地域人材の発掘、育成を通して、産山の自然や産業等の魅力 を伝え、産山村が一体となって移住定住の促進につなげる。	
方法	関係団体のつながりづくりを重視した講義やワークショップ形式の研修	
回数	演題・内容	講師
1	演題	一般財団法人 「星のふるさと」 専務理事 井上 茂美
	内容	
2	演題	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	
3	演題	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	

2 2年次の計画

講座企画		
テーマ	地域の魅力 再発見！産山プロジェクトⅡ ～もりあがろう！ 人・もの・地域のコミュニティ～	
講座目標	地域人材の育成を通して、産山村の自然や産業等の魅力を再発見する資質を高め、地域コミュニティにおける総合力の向上を目指す。	
方法	関係団体のつながりづくりを重視した講義やワークショップ形式の研修	
回数	演題・内容	講師
1	演題	熊本県立大学 教授 柴田 祐
	内容	
2	演題	熊本県立大学 教授 柴田 祐
	内容	

3 3年次の計画

講座企画		
テーマ	地域の魅力 再発見！産山プロジェクトⅢ ～もりあがろう！ 人・もの・地域のコミュニティ～	
講座目標	地域人材の育成を通して、産山村の自然や産業等の魅力を再発見する資質を高め、地域コミュニティにおける総合力の向上を目指す。	
方法	関係団体のつながりづくりを重視した講義やワークショップ形式の研修	
回数	演題・内容	講師
1	演題	やねだん 鹿児島県鹿屋市 柳谷地区 自治公民館 館長 豊重 哲郎
	内容	



3年間の取組を通して、地域づくりの進め方や課題の把握について、参加者と共有することができた。現状の取組の強化と、今後の事業に対する見通しや支援体制の構築ができる雰囲気、生まれつつある。

4 3年目の講座の実際

【第1回】

鹿児島県鹿屋市柳谷町町内会（通称：やねだん）の豊重哲郎氏（柳谷地区自治公民館長）を講師に招き、「やねだんに学ぼう～行政に頼らない村おこし～」という演題で講演をしていただいた。「平成30年度ふるさとづくり大賞 内閣総理大臣賞」をはじめ数々の受賞歴やTVや雑誌等でも紹介されている「やねだん」の取組は非常に示唆に富む内容であった。

「住民自治」「自主財源確保」「還元」という理念の下、サツマイモ栽培や土着菌製造、焼酎製造による補助金に頼らない財源確保。その活動を支えるものは住民であり、地域を一つのチームとして、住民の自主的な活動につなげていく手法について豊重氏の経験や実践から具体的に説明された。

また、地域の未来にも目を向けて、地域の子供たちに活躍の場を用意して、愛着を持ってもらうことが、将来的なUターン、Iターンにもつながり、人口減少の対策にもなっていることについても語られた。

内容が、産山村の現状とリンクしており、講座終了後の質疑も盛んに行われた。住民が主役となって村おこしをする優れた実践例は、産山村での地域づくりにも示唆を与えるものとなった。



豊重氏の講話を熱心に聞き入る参加者



「やねだん」の実践を熱く語られる豊重氏

4 3年目の成果と課題

【成果】

産山村の各種団体のリーダーが、本講座を通して、村おこしに関する豊富な情報や知識を得ることができた。特に「住民自治」「自主財源確保」等の具体的な事例が紹介されたので、今後の地域づくり、定住、移住に向けた取組に対しての見通しを持ち、活動意欲の高まりが感じられるようになった。

【課題】

講座の意義を理解していただくことができた。今後生涯学習の観点から学び続ける村民としての学びを提供できる環境を整備していく必要がある。

5 3年目以降の展開

山村留学制度、村おこし活動への理解と活動内容の周知にもとづく、村民が元気になる研修を引き続き開催していく。次年度以降は、本村独自の学びの機会を生み出し、生涯学習講座を生かした地域おこし、村おこしへと学びの拡張をねらう。

【事例2】地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目的とした講座（和水町）

1 1年次の計画

地 域 課 題
<p>○地域学校協働活動の分野で、本の読み聞かせなどの地域活動を行うボランティア人材の育成や新たな人材の発掘不十分である。</p> <p>○公民館自主講座の企画・立案を推進する仕組みづくりが必要である。</p>



事 業 目 標
<p>若い世代だけでなく、子育てや仕事を終えて、自分の時間を持てる、リタイヤ世代の方々に「子育て世代のサポーター的役割」を担っていただけるような取組に繋げる。</p>



講 座 企 画		
テーマ	<p>みんなが子育てサポーター！ ～楽しい図書室と居場所づくり～</p>	
講座目標	<p>地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目指し、1年目は、本の読み聞かせを行うボランティア人材の育成を行う。また、地域住民への本講座の周知を図る。</p>	
方法	<p>受講対象者を子育て世代やリタイヤ世代と幅広く設定し、講義形式とワークショップ、体験活動を取り混ぜて行う。</p>	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<p>くまもと県民カレッジ認定講師 永塩 和佳</p>
	内容	
2	演題	<p>くまもと県民カレッジ認定講師 永塩 和佳</p>
	内容	
	内容	

2 2年次の計画

地域課題
<p>○地域学校協働活動の分野で、本の読み聞かせなどの地域活動を行うボランティア人材の育成や新たな人材の発掘不十分である。</p> <p>○公民館自主講座の企画・立案を推進する仕組みづくりが必要である。</p>



事業目標
<p>若い世代だけでなく、子育てや仕事を終えて、自分の時間を持てる、リタイヤ世代の方々に「子育て世代のサポーター的役割」を担っていただけるような取組に繋げる。</p>



講座企画		
テーマ	みんなが子育てサポーター！ ～地域の楽しい居場所づくり～	
講座目標	地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目指し、2年目は、子どもの居場所づくりやボランティアの活性化等、地域人材の活用へ向けたワークショップ等を行う。	
方法	受講対象者を子育て世代やリタイヤ世代と幅広く設定し、講義形式とワークショップ、体験活動を取り混ぜて行う。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	くまもと県民カレッジ認定講師 荒木 康孝
	内容	
2	演題	くまもと県民カレッジ認定講師 萩尾 泰宏
	内容	



「遠くに飛ぶ紙ヒコーキ」のこつを学ぶ受講生



「ハンドスプレー」作りに夢中な受講生

2 3年次の計画

地 域 課 題
<p>○地域学校協働活動の分野で、本の読み聞かせなどの地域活動を行うボランティア人材の育成や新たな人材の発掘不十分である。</p> <p>○公民館自主講座の企画・立案を推進する仕組みづくりが必要である。</p>



事 業 目 標
<p>若い世代だけでなく、子育てや仕事を終えて、自分の時間を持てる、リタイヤ世代の方々に「子育て世代のサポーター的役割」を担っていただけるような取組に繋げる。</p>



講 座 企 画		
テーマ	<p>みんなが子育てサポーター！ ～地域の楽しい居場所づくり～</p>	
講座目標	<p>地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目指し、2年目は、子どもの居場所づくりやボランティアの活性化等、地域人材の活用へ向けたワークショップ等を行う。</p>	
方法	<p>受講対象者を子育て世代やリタイヤ世代と幅広く設定し、講義形式とワークショップ、体験活動を取り混ぜて行う。</p>	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<p>くまもと県民カレッジ認定講師 稲田 裕子</p>
	内容	
	健康音楽講座 音楽の花束～音楽で素敵な笑顔に～	
	地域健康づくりサポーターの養成 ・音楽の講座を通して、地域の健康づくりサポーター的人材育成を目指す。	



参加者アンケートをもとに、次年度への展開（ワークショップ）を検討する。また、参加者リストを基に、更なる地域人材の発掘を推進する。

3 3年目の講座の実際

【講座の概要】健康音楽講座 音楽の花束～音楽で素敵な笑顔に～

講師：くまもと県民カレッジ認定講師 稲田 裕子 氏

本年度の講座には、ボランティア活動や介護予防教室に参加されている住民の方々が多く受講された。音楽を活用した講座内容であったため、参加者は「歌うこと」「音を楽しむこと」を通して、心身ともにリフレッシュできる時間となった。

【参加者の反応】

参加者からは、「音を楽しむことの大切さを感じた」「歌は人の心をつなぎ、笑顔を増やすものだ」と改めて実感したなどの声が寄せられた。また、講座を通して、音楽が詩や心、生き方など多様な世界へ広がることを体感できたという意見も多く、満足度の高い講座となった。

講座主催者としても、参加者の反響の大きさから、歌うというストレートな自己表現が活力を生み出していることを実感した。アンケート結果からも、非常に充実した講座であったことがうかがえた。



手を動かしながら楽しく歌う受講生

4 3年目の成果と課題

【成果】

- ・これまでの講座内容が自主講座へ直接つながった例はなかったが、今回の音楽講座は、介護予防のグループ等で活用される見込みがあり、地域での実践につながる成果が見られた。
- ・参加者が「日頃から続けたい」と感じる内容であり、継続的な活動への意欲を引き出すことができた。
- ・想定した対象者が概ね受講し、広報紙・防災無線・HP など多様な媒体を活用した広報が効果的であった。

【課題】

- ・行政区長からの要望によりチラシ配布回数を減らしていることもあり、情報が届きにくい層が生じている。広報手段のさらなる工夫が必要である。
- ・今回の参加者をグループとして継続的に活動できるような仕組みづくりが課題である。
- ・講座終了後の評価を踏まえ、単費での講師依頼など、次年度に向けた方針の検討を進める必要がある。



講師とともに問題を出す受講生

5 地域活動の実際

【活動概要】

受講者の多くは、既に地域でボランティア活動や介護予防教室に参加している住民であった。

講座で得た学びを、地域に持ち帰り、活動の場で活かしていくことが期待される。

【気づき・感想】

音楽を通じた体験は、参加者の心を豊かにし、地域での活動にも良い影響を与えると感じられた。講座内容が地域の介護予防や交流活動に広がる可能性が高い。

6 次年度以降の展開

次年度は、これまでの講座が地域に根づくよう、フォローアップの方法を検討していく。また、参加者が継続的に活動できる仕組みづくりや、講座内容のさらなる充実を図り、地域の人づくりにつながる講座運営を目指す。

2節「地域の人づくり講座」2年次経過報告

【事例3】地域人材の育成・活用による公民館講座の実施を目的とした講座（上天草市）

1 1年次の計画

地域課題		
<p>○少子高齢化や人口減少により、地域や公民館の活動回数や内容に地域差があったり、地域行事や公民館活動への住民参加が少ない地域があったりしている。</p> <p>○地域を活性化する持続可能な活動を企画・運営できる人材が固定化するなど、人材が不足している地域がある。</p> <p>○人材バンクが作成されていないなど、地域リーダーが発掘できていない。</p>		
事業目標		
<p>持続可能な活動を企画・運営できる人材を発掘・育成し、地域や公民館活動を活性化する。</p>		
講座企画		
テーマ	<p>みんなで考えよう！楽しい講座やイベント！</p>	
講座目標	<p>最終目標：毎年少なくとも1回は持続可能な活動を公民館や地域で実施する。</p> <p>○1年目 地域リーダーを発掘・育成し、イベントの企画書を作成する。</p> <p>○2年目 活動を実践・評価しながら次年度の持続可能な企画書を作成する。</p> <p>○3年目 企画書に沿った各事業の活動報告会を開催し、持続可能なイベントを継続的に実施する。</p>	
方法	<p>○ケーススタディ・ケースメソッド・講話・ワークショップ・実習（実践）活動報告会</p>	
回数	演題・内容	講師
1	演題	地域の資源を活かした事例から学ぼう
	内容	事例を通して、地域の資源の見つけ方や活用方法について学ぶ。
		一般社団法人パレット 代表理事 大滝 祐輔
2	演題	地域のお宝を発見しよう
	内容	地域資源や地域人材を活用した地域や公民館の活動（イベントや講座など）について学ぶ。
		熊本大学 熊本創世推進機構 准教授 田中 尚人
3	演題	地域リーダーの役割を学ぼう
	内容	地域リーダーとしての役割やリーダーシップやチーム作り、ネットワーク作りについて学ぶ。
		熊本県立大学 教授 柴田 祐
4	演題	企画書を作ろう
	内容	持続可能な地域や公民館の活動（イベントや講座など）の企画書を作成する。
		内閣府 地域活性化伝道師 三角 幸三
5	演題	広報（チラシ）の仕方や作り方を学ぼう
	内容	集客力が向上する広報の仕方を知り、実際にチラシを作成する。
		株式会社（談） 甲斐 由貴

2 2年次の計画

講座企画			
テーマ	みんなで考えよう！楽しい講座やイベント！		
講座目標	最終目標：毎年少なくとも1回は持続可能な活動を公民館や地域で実施する。 ○1年目 地域リーダーを発掘・育成し、イベントの企画書を作成する。 ○2年目 活動を実践・評価しながら次年度の持続可能な企画書を作成する。 ○3年目 企画書に沿った各事業の活動報告会を開催し、持続可能なイベントを継続的に実施する。		
方法	○ケーススタディ・ケースメソッド・講話・ワークショップ・実習（実践） 活動報告会		
回数	演題・内容	講師	
1	演題	中学生と企画書を考えよう	熊本大学 熊本創世推進機構 准教授 田中 尚人
	内容	中学生と受講生が協働し、地域資源を活かした新しい企画書を作成する学び。	
2	演題	イベント等を成功させるコツ	内閣府 地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	地域イベント成功の要点や人材の役割分担、資源活用の視点を学ぶ実践的講座。	
3	演題	ジェネレーション交流	なし
	内容	中学生と地域住民が意見交換し、多世代で地域の未来を考える交流活動。	



- 活動報告会を開催し、情報効果の場とすると共に地域リーダーの交流の機会とする。
- 講座やイベントの評価を行いながら、新たな活動の企画書を作成し、実践していく。

3 2年目の講座の実際（上天草市）

上天草市では、地域の人材不足や活動の固定化、住民参加の減少といった課題に対応するため、「地域の人づくり講座」を実施している。2年目となる本年度は、地域資源の活用や企画力の向上に加え、中学生との協働を取り入れた実践的な学びを展開した。

【第1回】中学生と企画書を考えよう

講師：熊本大学大学院 准教授 田中 尚人 氏

中学生が事前に作成した企画書をもとに、受講生と中学生がグループで協議しながら内容を修正し、新たな企画書を作成した。地域資源の活用方法や企画の組み立て方を学びつつ、多世代で意見を交わす貴重な機会となった。

受講生からは「中学生と活動できて新鮮だった」「世代を超えた交流が楽しかった」といった声が寄せられ、地域づくりにおける協働の可能性を実感する場となった。



地元中学生と地域住民との世代間交流の様子

【第2回】イベント等を成功させるコツ

講師：内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三 氏

地域イベントを成功させるための視点や人材の役割分担について学んだ。講師が示した「新桃太郎体制」は受講生にも分かりやすく、地域づくりに必要な人材像を具体的に理解する助けとなった。また、身近な資源を活かした企画づくりの視点が示され、地域資源の再発見につながった。



地域について考えを出しあう受講生

4 2年目の成果と課題

【成果】

中学生との協働により、新しい視点を取り入れた企画づくりが実現した。中学校での公開授業「ジェネレーション交流」では、地域住民と中学生が直接意見を交わし、多世代で地域を考える場が生まれた。

受講生からは「視野が広がった」「地域について考える良い機会だった」といった声が多く、講座が学びと交流の場として高く評価された。また、一部の公民館では新たなイベント開催に向けた動きも見られ、地域活動の活性化に向けた契機となった。

【課題】

中学生と作成した企画を公民館活動として実施するまでには至らず、地域全体への広がりは限定的であった。地域によっては人材活用が組織的に行われず、一部の役員に負担が集中している状況も見られた。

また、若い世代の参加拡大は一定の成果があったものの、継続的に関わる仕組みづくりが課題として残った。活動報告会が開催できなかったことも、成果共有の面で課題となった。

5 3年目以降の展開

3年目は講座の最終年度にあたり、これまでの取り組みを総括し、持続可能な地域活動の定着を図る重要な時期となる。中学生と共に作成した企画を公民館活動へ広げ、地域住民が主体的に参加できるイベントとして実施することが求められる。

また、小中学生も参加できる持続可能なイベントの企画を促し、世代を超えた地域づくりの基盤を強化していく。さらに、3年間の成果を共有する活動報告会を開催し、成功事例を地域全体で共有することで、今後の活動の広がりにつなげたい。

3節「地域の人づくり講座」1年次経過報告

【事例4】地域人材による主体的な公民館講座の開発・実施を目的とした講座（あさぎり町）

1 1年次の計画

地 域 課 題
<p>○少子高齢化・人口減少の影響が、年ごとに色濃くなり、住民の中の「自分たちの課題は協力して乗り越える」気力が次第に後退。</p> <p>○住民が主役となる講座体制が確立されていない。 （行政主導の講座やイベントが多数派であり、住民は常に受け身の立場となりがち）</p> <p>○コロナウイルスの自粛期間が長かったため、これまで続いていた地域行事などが減り、伝承が途切れたり、忘れ去られたりしようとしている。</p>



事 業 目 標
<p>○地域活性化のために、住民自ら主人公または参謀役となって、地域を巻き込んだ活動に関心を持つきっかけを提供する。</p> <p>○対象団体ごとに、持続可能な活動ができる「先駆者的人材」を1名以上育成し、人材同士のネットワークを構築しながら、地域課題の解決をめざす。その後、先駆者に刺激を受け、教えるよりもハードルの低い「一緒に楽しむ」視点から企画する新規参入者を生み出しながら、生涯学習講座や公民館活動等を充実させる。</p>



講 座 企 画		
テーマ	みんなで考えよう！「あさぎり町」だからできる楽しい講座やイベント	
講座目標	<p>最終目標：あさぎり町における住民主体の公民館活動の体制構築（あさぎりモデルの開発→毎年少なくとも1回は持続可能な活動を公民館や地域で実施する。）</p> <p>○1年目 今後の事業の進め方について見通しを持つ。</p> <p>○2年目 あさぎり町のモデル講座となるような持続可能な企画書を考案・作成する。</p> <p>○3年目 企画書に沿ったモデル事業の活動報告会を開催し、持続可能なイベントの継続的な実施につなげる。</p>	
方法	○講演、ワークショップ、体験活動、現地学習、イベント交流など	
回数	演題・内容	講師
1	<p>演題 やってみよう！～公民館活動を通じた地域づくり～</p> <p>内容 公民館の活動がさかんな地域の先進的な活動や取組を通じて、活動の立ち上げ方、地域資源の活用法について学ぶ事例を通して、地域の資源の見つけ方や活用方法について学ぶ。</p>	<p>熊本大学 熊本創世推進機構 准教授 田中 尚人</p>



○優れた実践例から具体的な活動イメージを持つと共に、地域リーダーの交流の機会とする。

2 1年目の講座の実際

【第1回】

熊本大学大学院先端科学研究科准教授の田中尚人氏を講師に招き、「やってみよう！～公民館活動を通じた地域づくり～」という演題で講演とワークショップを行っていただいた。田中氏は、県内各地の地域づくりに携わっておられ、その中からいくつか事例を紹介された。世界遺産である三角西港を校区に持つ三角小学校の児童がふるさとのよさを再認識していく事例や熊本地震からの復興を地域住民が協力しながら進めた益城町の事例等が紹介された。「ふるさとのよさの再認識」や「住民主体の町おこし」は、あさぎり町が指向する公民館活動を通じたまちづくり（住民の主体者意識の醸成）にとって、非常に示唆に富む内容であった。

その後のワークショップでは、4～5人のグループに分かれ、「みんなで楽しい企画書をつくろう」というテーマの下、受講者の子どもの頃の体験や現在行っている活動をベースにしなが、これから取り組んでみたい活動やイベントについてアイデアを出し合った。

本講座は、あさぎり町公民館分館長会と合わせて開催されており、参加者は、各公民館分館長に加え、婦人会、子ども会、青年団等の社会教育団体及び、地域おこし協力隊、行政関係者等、様々な団体から総勢52名の参加があった。ワークショップを通じ、参加者同士のつながり作りができたことも成果の一つである。また、講師の田中氏は、熊本県公立高校のあり方検討会の副会長も務められており、本講義には、高校魅力化コンソーシアムの南稜高校（あさぎり町）担当のコーディネーターの方も参加された。2年目以降に南稜高校との連携も考えられる。2年目のあさぎり町のモデル講座の開発につながる講座となった。



講師の話熱心に聞き入る受講生



「ワークショップ」で話し合う受講生

3 1年目の成果と課題

【成果】

社会教育に携わる人同士がつながり、ワークショップでの情報交換や対話を通じて、参加者がそれぞれの考えを言葉にし、互いの意見に触れる機会となった。

地域活動において、成功・失敗を即座に評価するのではなく、続けながら学ぶという考え方を取り入れることができた。

【課題】

今後、今回共有された視点を踏まえ、継続的な学びや意見交換の場のあり方について整理していく必要がある。

4 2年目以降の展開

来年度以降の研修については、今回示された考え方を土台としつつ、より具体的で実践に結びつきやすい内容へ段階的に展開していきたい。

○考え方・姿勢を確認する研修

○実際の取り組み事例を知る研修

○自分たちの地域でどう応用できるかを考える研修

これらを組み合わせて、「理解 → 模倣 → 応用」の流れを意識した構成とし、「話を聞いて終わる研修」ではなく、やってみようと思わせる点を重視したい。

第4章 学習機会提供事業

【くまもと県民カレッジ主催講座①】

コース名	熊本学（西南戦争）コース
テーマ	西南戦争の真実 ～熊本の激動の歴史を振り返る～
背景	西南戦争から150年を迎えようとしている今、熊本の地で起きた内戦の歴史的背景や、西郷隆盛をはじめとする人物像、そして熊本県内でどのような人々が躍動していたのかを学ぶことは、地域の歴史理解を深めるうえで重要である。
ねらい	西南戦争に関する歴史的事実や人物、現地の状況を学ぶことを通して、県民が郷土の歴史をより深く理解し、地域への関心と誇りを高める。

回	演題	講師	日時
1	西南戦争と旧熊本藩士 ～党薩隊・鎮撫隊・細川家～	熊本大学永青文庫研究センター 准教授 今村 直樹	火曜 14:00～ 15:30
2	現地学習：激戦！田原坂 ～西南戦争をたどる1～	熊本市文化財課 美濃口 雅朗・中原 幹彦	
3	熊本城の攻防 ～西南戦争をたどる2～	熊本市文化財課 中原 幹彦	
4	薩摩軍 人吉の地へ ～西南戦争をたどる3～	人吉市教育委員会文化課文化財係 係長(学芸員) 岸田 裕一	
5	創業と守成の大材 ～西郷と大久保～	鹿児島市維新ふるさと館 特別顧問 肥後 秀照	

<成果>

- ・西南戦争の背景、熊本城の攻防、田原坂の激戦、人吉での薩摩軍の動きなど、熊本の地で起きた内戦を多角的に学ぶことができた。
- ・現地学習を通して、地形や展示品から戦いの過酷さを実感し、受講者の理解が深まった。
- ・西郷隆盛と大久保利通の人物像を比較することで、明治維新期の政治の動きをより具体的に捉えることができた。



☆実施上のポイント☆

○講義と現地学習を組み合わせた構成

田原坂資料館・公園での現地学習を取り入れ、史料と現地に残る史跡の両面から学ぶことで、理解を深める構成とした。

○多角的な視点から「西南戦争」を学ぶ

「熊本藩士」「熊本城」「田原坂」「人吉」「西郷と大久保」など、地域・人物・史料を多面的に扱い、受講者が西南戦争を立体的に捉えられるよう工夫した。



【くまもと県民カレッジ主催講座②】

コース名	生き方コース
テーマ	自己肯定感を高めるための実践講座 ～新たな自分に出会うとき～
背景	自己肯定感を高めることは、幸福感や自己成長につながり、人生の質を向上させると言われている。本講座では、心理学的な視点やワークを通して自己肯定感を高める方法を学び、日常生活に取り入れることを目的とした。
ねらい	自己肯定感の基礎理解と実践的な方法を学ぶことで、自分らしい生き方を見つめ直し、より前向きに生活できる力を育む。

回	演題	講師	日時
1	自己肯定感って何だろう？ ～心理学の視点から～	九州ルーテル学院大学 助教 恒松 総一郎	金曜 14:00～ 15:30
2	心にエール！自分を幸せに導く“解釈力” ～毎日を明るく生きるコツ～	オフィス久松 代表 心理カウンセラー 久松 恵子	
3	アドラー心理学と自己肯定感 ～困難があるからこそ人生は面白い？～	(一社)日本アドラー心理学協会 マスター・プラクティショナー 山口 美澄	
4	自己成長のステップを続ける ～目標の作り方と達成のコツ～	コーチングルーム オフタイム 代表 芦村 恵	
5	新しい自分に出会うマインドフルネス ～心のバランスを保つ方法～	九州ルーテル学院大学 教授 古賀 香代子	

<成果>

- ・心理学・アドラー心理学・コーチング・マインドフルネスなど、多角的なアプローチで自己肯定感を学ぶことができた。
- ・ワークや対話を通して、自分の心と向き合い、前向きな考え方や行動のヒントを得ることができた。



☆実施上のポイント☆

○体験型のワークを多く取り入れた構成

講義だけでなく、対話・グループワーク・実践を多く取り入れ、受講者が自分自身の心と向き合えるよう工夫した。

○多角的な視点から「自己肯定感」を学ぶ

心理学・アドラー心理学・コーチング・マインドフルネスなど、異なる専門分野を組み合わせ、受講者が自分に合った方法を見つけられるよう構成した。

【くまもと県民カレッジ主催講座③】

コース名	未来の食卓コース
テーマ	未来の食卓をデザインする ～持続可能な食生活と新しい食文化～
背景	人口増加や環境問題により、食のあり方が大きく変わりつつある。持続可能な食生活を考えることは、これからの社会にとって重要である。
ねらい	持続可能な食のあり方を学び、未来の食卓を支えるために私たちができることを考える。新しい食文化への理解を深め、日常生活に活かせる視点を身につける。

回	演題	講師	日時
1	どうなるこれからの食卓？ ～発酵食品でおいしい未来をつくろう～	東海大学農学部 講師 多賀 直彦	金曜 14:00～ 15:30
2	昆虫を食べる時代がやってくる？ ～昆虫食の可能性と未来～	崇城大学生物生命学部 教授 太田 広人	
3	肉がラボで作られる？ ～培養肉の革命～	九州大学大学院農学研究院 副理事・教授 中村 真子	
4	海水・塩地でも野菜は育つ ～塩の対策とその利用～	熊本県立大学環境共生学部 教授 松添 直隆	
5	未来につなげる食文化 ～伝統料理を再考する～	尚綱大学短期大学部食物栄養学科 助教 小林 康子	

<成果>

- ・実物に触れる体験やグループでの意見交換により、受講者の理解が深まり、学びが広がった。
- ・食の背景や環境問題を踏まえ、持続可能な食生活について考えるきっかけとなった。



☆実施上のポイント☆

- 多様な専門分野から「未来の食」を学ぶ構成
発酵・昆虫・培養肉・塩害・郷土料理と幅広いテーマを扱い、受講者が興味を持ちやすい内容とした。
- 体験・対話を取り入れた学び
昆虫食の実物展示やグループワークなど、体験的な学びを取り入れ、理解を深める工夫を行った。

【くまもと県民カレッジ主催講座④】

コース名	共生社会の現実コース
テーマ	みんな違って、みんないい ～多様性を尊重する社会を目指して～
背景	多様な文化や価値観に触れる機会が増える中で、互いの違いを理解し尊重する姿勢が求められている。本講座では、多様性を認め合う社会のあり方について考える機会とした。
ねらい	基本的人権、ジェンダー、国際化、障がい者支援など、多様性に関わるテーマを学び、誰もが自分らしく生きられる共生社会について理解を深める。

回	演題	講師	日時
1	すべての人が幸せに生きるために ～今、もう一度考える「基本的人権」～	熊本大学法学部 教授 倉田 賀世	木曜 14:00～ 15:30
2	「性別っていくつあるの？」 ～小さな問いが社会を変える～	(一社) ヒューレックアカデミー協会 代表理事 水間 義仁	
3	どうなっているの？熊本の国際化 ～熊本で生活する外国籍の人々～	(一財) 熊本市国際交流振興事業団 常務理事 八木 浩光	
4	誰もが輝ける職場とは？ ～企業の障がい者支援の取組～	(一社) 熊本県中小企業家同 友会 ダイバーシティ委員会 委員長 玉垣 和子	

<成果>

- ・基本的人権、ジェンダー、国際化、障がい者支援など、多様性に関する幅広いテーマを学ぶことができた。
- ・受講者同士の対話やグループ討論を通して、互いの価値観を知り、共生社会の実現に向けた視点が深まった。
- ・「当たり前」を見直し、多様な生き方を尊重する姿勢を育む機会となった。



☆実施上のポイント☆

○多様性を多角的に学べる構成

人権・ジェンダー・国際化・障がい者支援と、異なる切り口から共生社会を考える内容とした。

○対話を重視した講座運営

受講者同士の話し合いを取り入れ、互いの経験や価値観を共有することで理解を深めた。

鳥取県立生涯学習センター



1 施設の概要

鳥取県生涯学習センターは、県民の多様な学習ニーズに応える拠点として、県民カレッジ事業を中心に生涯学習の推進を担っている。センターでは、県内の市町村や大学等と連携し、地域課題に応じた講座を企画・実施している点が特徴である。

特に「とっとり県民カレッジ講座（市町村連携）」は、県内の市町村が抱える地域課題をテーマに、県と市町村が協働して講座をつくりあげる仕組みであり、地域に根ざした学びの場として機能している。

2 施設の役割

- (1) 学習拠点：複数研修室（大規模研修室を含む）を活用し、講義・ワークショップ・グループ討議・フィールドワーク等の場を提供。
- (2) 相談窓口：学習相談・地域活動相談に対応し、受講後の実践につながる相談機能を重視。
- (3) 情報発信：情報誌「生涯学習とっとり」（年6回発行）、新聞折り込みチラシ（年1回発行）、館内掲示・配架、県市町村公報、地元紙、Web・SNS等により講座情報・募集・実施報告を告知し、参加の裾野拡大を図る。

3 施設運営の特徴

鳥取県立生涯学習センターでは、以下のような事業を展開。

- ・市町村との協働による講座企画（市町村連携講座）
- ・大学等との連携による特別講座の実施（特別講座）
- ・地域づくりスキルアップ講座（自主事業）
- ・職員による出張講座「カプラで遊ぼう！」（自主事業）
- ・「まちの保健室」（自主事業）
- ・まなび・ふれあい交流会（自主事業）
- ・学習スペースの提供
- ・展示やイベント発表の場の提供

4 先進的な取組

「とっとり県民カレッジ講座」の取組 県教委社会教育課委託事業

(1) 企画～実施～評価の流れ

- ・企画段階：県民カレッジの柱として「市町村連携講座」と「特別講座（高等教育機関連携）」を設定している。市町村からの要望・地域課題を起点にテーマを共創している。企画会議を複数回実施している。
- ・実施段階：講義にとどまらずワークショップの時間を組み込み受講者の主体的アウトプットを促進している。現地学習（フィールドワーク）を活用している。
- ・評価段階：受講者アンケート・担当職員・市町村職員の振り返り、有識者からなる

県民カレッジ運営協議会（年2回）での評価を、次回企画の改善に反映している。満足度だけでなく、受講後の地域実践（自主企画の立ち上げ、継続回数、連携先拡大）を成果指標として重視している。

(2) フィールドワーク・グループワークの実践例

- ・フィールドワーク：テーマに応じた地域資源や現場訪問を通じ、地域課題の現地理解を重視している。空き家対策、防災等で現場視察や関係先訪問を組み込み、学びの実感と理解の深化を図っている。
- ・グループワーク：講義と話し合いをセットで実施している。ワークショップへの心理的ハードルに配慮し、「感じたことの共有」から始める段階設計により参加負担を下げ、満足度向上と学びの定着を促している。

(3) 事業の詳細（職員の役割・予算・参加状況）

- ・職員の役割：カレッジ担当職員2名が中心となり連携先と協力し、企画立案、講師選定、会場運営、広報、評価・改善を分担している。
- ・予算：おもに指定管理料で運営している。講師の招聘にかかる費用はセンターが負担し、会場は連携先の市町村が確保している。
- ・参加状況：受講者の固定化が課題である（高齢者層中心）。地域連携講座により新規層の獲得や地域偏在の是正を狙っている。半日開催の講座が参加しやすい傾向があり、最大50名規模の集客事例もある。若年層の参画促進が課題である。

(4) 市町村との協働、連携機関、講師選定基準

- ・協働：県内を3ブロックに分けた東・中・西の各地域の社会教育担当者会議で声かけをしている。西部地区では年次の連携が定着している。市町村とはテーマ提案から企画・広報・運営まで伴走型で協働している。
- ・連携機関：高等教育機関、市町村教育委員会・関係部署（空き家担当など）と連携している。
- ・講師選定基準：地域課題の実務に関わる専門家や現場担当者を積極的に起用している。専門性、地域関連性、実践知、ファシリテーション能力を重視し、講義のみで終わらず話し合いを重視している。

(5) 成果と課題

- ・地域課題に即した講座形成により「地域実装志向」への転換が進んでいる。
- ・同一地域での継続開催（2～3年連続）や受講者側の自主企画化が生まれている。
- ・話し合いや現場見学の導入で理解が深まっている。
- ・受講者の固定化・偏在、若年層・子育て・就労世代の参加不足が課題である。

5 「とっとり県民カレッジ講座（市町村連携）」の実際

市町村連携講座は、センターが市町村に対して実施を呼びかけ、希望する市町村と協働して講座を企画する。

(1) 企画の進め方（R7の実践：「空き家が持つ可能性」）

- ・11月頃に市町村へ募集。
- ・希望市町村と2～3回の企画会議を実施。
- ・市町村の担当者や、必要に応じて他部署（例：空き家担当）も参加。
- ・地域課題（防災、空き家、若者との交流など）をテーマに講座内容を決定。



- ・夏～秋に講座を実施。
- ・企画段階で市町村と丁寧に対話し、地域の実情に合わせて講座をつくる点が大きな特徴。

(2) 講座内容の特徴

- ・講義だけでなく、ワークショップ的要素を取り入れることが多い。
- ・受講者が地域の課題を自分事として考える機会をつくる。
- ・講座後に地域での実践につながるよう、市町村担当者が受け皿となる。

(3) 成果と課題

- ・地域課題に即した講座となるため、受講者の満足度が高い。
- ・市町村のモチベーションが高いほど成功しやすい。
- ・一方で、企画段階の負担は大きく、市町村担当者の異動などで継続性が課題となる場合もある。



6 その他の事業例

(1) 大学との連携による特別講座

- ・県内の大学が企画した講座を、県民カレッジとして広報等に協力する仕組み。
- ・地域課題の解決や地域づくりに関連する幅広いテーマが扱われている。

(2) 職員による出張講座

- ・子育て世代の参加が難しいという課題に対し、職員が地域の保育園・幼稚園・こども園・小学校に出向いて講座「カプラで遊ぼう！」(年3回)を実施している。人気が高く、保護者の参加も多い。

(3) 学習スペースの提供

- ・センターでは中学生・高校生に学習スペースを提供し、平日の放課後、休日の利用が多い。



7 まとめ

鳥取県の取組は、市町村と連携した講座づくりや大学との協働、講師選定などを通じて、地域に根ざした学びを進めている点に特徴がある。特に、市町村連携講座では、地域課題をテーマに企画し、講座後の実践につながる事例があり、学びが地域に循環する流れが生まれている。

熊本県においても、受講者の固定化の解消、学びを地域で生かす仕組みづくり、市町村との協働、受講者・修了者の活躍の場づくりといった観点で参考になる点が多い。一方で、若年層・子育て世代の参加の少なさなど、共通する課題も見られる。

今後は、「市町村との協働体制の整備」、「フォローアップや現地見学を含む学びの循環づくり」、「夕方・週末・オンラインなど多様な開催枠の確保」、「講師・連携機関のネットワーク化」といった点を段階的に進めることで、地域実装型の講座に近づくと考える。

また、熊本県としては、限られた体制や予算を踏まえ、講座の精選や重点化も検討する必要がある。無理なく続けられる仕組みを整えつつ、各地域と連携・協働できるような講座を考え、実践していく必要がある。

発 行 者：熊本県
所 属：熊本県教育庁市町村教育局社会教育課
発行年度：令和7年度(2025年度)